

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 木村 祐子
学位：博士（社会科学）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学、社会学	教育社会学、医療社会学	
主要担当授業科目	保育原理Ⅰ、家族臨床演習Ⅰ・Ⅱ、保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習指導Ⅰ、保育・教職実践演習（幼・小）、課題研究A・B	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
① 映像データや資料（新聞、雑誌、図表等）の活用	平成 20年 4月～	講義内容に関連した映像を学生に見せ、現代の教育問題を身近な問題として理解し、多面的に考えることの重要性を伝えた。映像や統計データの使用は、授業内容の理解度の高まりに有効であった。また、映像の視聴だけで終わることがないように、各自意見をまとめ、議論する機会を設けた。
② コメントペーパーの活用	平成 23年 9月～	講義の終盤、学生に授業の感想や疑問点などをコメントペーパーに書かせ、次の授業でその内容を紹介・解説しフィードバックした。それにより、学生の文章力の向上や物事を考える力を養成することができた。（武蔵大学、玉川大学、聖徳大学）
③ 調査方法（実践編）	平成 26年 10月～平成 27年 1月	質的調査方法の授業では、実践編として学生同士でインタビュー調査を実施させた。実際に調査を経験することで、インタビューの面白さを実感でき、また、反省点や難しかった点が明確になり、質的調査への関心が高まった。（お茶の水女子大学）
2 作成した教科書、教材 『1回で受かる！保育士過去問題集』 14年版-16年版、成美堂出版	平成 26年 3月 1日～平成 28年 1月 10日	保育士試験の過去問題集で「教育原理」（2014、2015年版）「保育原理」（2015、2016年版）の解答・解説を担当した。
田岡由美子編『新時代の保育双書 とともに生きる保育原理』、みらい	平成 30年 4月 10日	保育原理のテキストを執筆した。「第9章 保育におけるさまざまな配慮」（pp.122-132）を担当し、乳幼児の健康や安全についての配慮、障害児への対応などについての基本的な知識を整理した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価	平成 28年 4月～	「授業評価アンケート」では5段階評価のうち、概ね4以上の評価を得ている。
4 実務の経験を有する者についての特記		
5 その他 高等学校での模擬授業	平成 28年 12月 20日 平成 29年 7月 18日	東京都立杉並総合高等学校（保育・幼児教育、1年生対象） 埼玉県立久喜高等学校（教育学、2年生対象）

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許 学芸員資格取得 (南大証第 1119 号) 専門社会調査士取得 (第 001811 号)	平成 13 年 3 月 20 日 平成 24 年 10 月 1 日			
2 特許等		特になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 第 36 回進路指導 (就職) 全県研究会 (長野県) 講師 第 55 回全国学生相談研修会	平成 24 年 1 月 28 日 平成 29 年 12 月	高等学校の教員対象。「若年者の雇用・就業の現状と展望」について講演した。 日本学生相談学会主催の研修 3 日間に参加し、修了した。		
4 その他 (研究助成) ①お茶の水女子大学 21 世紀 COE 公募研究 平成 18 年度 ②財団法人社会安全研究財団 平成 18 年度 < B 若手研究助成 > ③特別教育研究経費による事業コミュニケーションシステムの開発によるリスク社会への対応 (お茶の水女子大学) ④お茶の水女子大学グローバル COE 公募研究 ⑤日本学術振興会平成 26 年度研究成果公開促進費「学術図書」	平成 18 年 平成 18 年 平成 18 年 平成 19 年 平成 26 年	「少年非行における医療的解釈と実践の構造一言説分析と臨床家へのインタビュー調査から」 「少年非行の心理・医療的な解釈と臨床的実践の構造」 「発達障害児への支援体制に関する社会学的研究—『連携』の観点から」 「ビジネスにおける心理学的な知識の活用と意識—採用と職業指導の場面から」 「発達障害支援の社会学」 (課題番号 265207)		
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 『発達障害支援の社会学』	単著	平成 27 年 2 月	東信堂	子どもの問題行動は「発達障害」にともなう諸症状として医療的に再解釈され、対処されるようになった。しかし、支援現場では、障害の定義や支援方法が確立されておらず、混乱した状態であった。そこで、発達障害児支援の実態を明らかにし、その背景や原因を分析・考察した。具体的には、①発達障害支援の制度的背景、②支援の実態把握 (小学校、療育施設、矯正施設)、③医療に対する人々の態度・志向性に焦点をあてた。研究方法は、文献・資料調査とインタビュー調査を用いた。
2 『教育社会学事典』	共著	平成 30 年 1 月	丸善出版	「医療化と発達障害」(pp.552-553)を担当した。発達障害を医療化現象の一つと捉え、病いの社会的構築性や政治性を説明した。また、教育現場における支援上の問題は現場の論理でうまく運用・管理されていることを指摘した。

<p>3 『平等の教育社会学—現代教育の診断と処方箋』</p>	<p>共著</p>	<p>平成31年2月</p>	<p>勁草書房</p>	<p>「発達障害児・者」として支援を受けるかどうかは、発達障害児の親の属性（家庭環境、経済力など）や医療に対する意識や態度（障害の受容度、熱心さ、情報収集力など）に左右されることを親の語りに基づいて明らかにした。これは医療アクセスの格差であるが、医療格差に焦点をあてれば、発達障害は実体化されたものとして取り扱われる。逸脱研究が蓄積してきた社会的構築性の観点を見失うことになり、ジレンマを抱えることを論じた。 「第9章 選択としての発達障害と医療格差—発達障害児の親へのインタビュー調査から」(pp.141-158)</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1 「子どもの不適応的行動の医療化—『学習障害』概念の制度化過程」</p> <p>2 「医療化現象としての『発達障害』—教育現場における解釈過程を中心に」</p> <p>3 「中学生調査にみる心理主義的な意識と行動」</p> <p>4 「少年非行と障害の関連性の語られ方—DSM 型診断に</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成17年3月</p> <p>平成18年12月</p> <p>平成20年1月</p> <p>平成21年3月</p>	<p>お茶の水社会学研究会, 『Sociology Today』第14号, pp.18-30</p> <p>日本教育社会学会, 『教育社会学研究』第79集, pp.5-24</p> <p>南山大学紀要自然科学・保健体育, 『アカデミア』第14巻, pp.21-28 3節担当。</p> <p>お茶の水女子大学大学院人</p>	<p>1990年代中ごろから「学習障害」や「ADHD」などの障害の制度化が急速に進んだ。制度の成立・施行がどのような過程を経てなされたのかを文献・資料に依拠して分析した。分析では、医学的要因と社会的要因にわけて検討した。「学習障害」制度化は、単に医学的知見の蓄積によってではなく、親の会をはじめとする当事者団体や専門家集団によるクレーム活動によっておしすすめられたことを明らかにした。</p> <p>小学校で児童の不適応や逸脱がいかに医療的に解釈・支援されているのかを教員9名へのインタビュー調査に基づいて明らかにした。子どもの不適応や逸脱は医療的に解釈・支援されつつあったが、教員はそうした状況に、抵抗や葛藤を抱えていた。また、支援現場では曖昧で不確かな実践が多く存在していた。しかし、これらの問題は、現場の実践を円滑に行おうとする教員の戦略や肯定的な意味づけによって、最小限にされていた。</p> <p>質問紙調査に基づき、中学生(2年生)の心理主義的な意識や行動について考察した。心理主義的な意識は、大都市地域と非都市地域に狭まれた市部で高かった。特に、女子の方が友人関係において高度な感情管理を行う傾向にあった。しかし、高度な感情管理をしている者ほど、スクールカウンセラーに対して期待を抱いていなかった。 共著：加藤隆雄、小針誠、木村祐子</p> <p>1990年代以降、非行は発達障害など医療的に解釈されつつある。そこで、専</p>

<p>おける解釈の特徴と限界」</p> <p>5 「PTSD はいかに語られたかー新聞記事における心理主義化現象の分析」</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年3月</p>	<p>人間文化創成科学研究科, 『人間文化創成科学論叢』第11巻, pp.227-236</p> <p>お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 『人間文化創成科学論叢』第12巻, pp.191-199</p>	<p>専門家や実践家の文献に基づき、非行と障害の関係性がどのように語られているのかを明らかにした。非行の医療的な解釈は、既存の言説（環境要因や情緒的要因）を含むため、医療的な解釈と既存の解釈が併存する特徴をもっていた。</p> <p>PTSD（心的外傷後ストレス障害）がどのような社会問題と関連づけて語られているのかについて朝日新聞の記事内容を分析した。PTSD が語られる領域は、1990年代後半以降、「災害・事故」、「犯罪」、「教育」、「医療」、「労働」などへと拡大していた。また、診断が付与される対象も当事者から目撃者へ、被害者から加害者へ、大人から子どもへと拡大していた。PTSD は、以前のように、被害者のための障害としてではなく、誰もが患う可能性がある障害として語られた。 共著：木村祐子、小針誠</p>
<p>6 「少年非行における医療的な解釈と実践ー実践家の語りにもみる医療化プロセス」</p>	<p>単著</p>	<p>平成23年6月</p>	<p>日本教育社会学会, 『教育社会学研究』第86集, pp.159-178</p>	<p>矯正施設において、非行が医療的に解釈・支援されていくプロセスを実践家（家庭裁判所調査官、法務技官、法務教官）17名の語りに基づいて明らかにした。特に、医療実践にみられる曖昧さを医学上の不確実性と組織上の不確実性に類型化し、それらが実践家によっていかに管理・運用されているのかについて明らかにした。</p>
<p>7 「子どもの不適応・逸脱の医療化ー日本の学校・療育施設・矯正教育の現場における実践家の解釈過程ー」</p>	<p>単著</p>	<p>平成25年3月</p>	<p>博士学位論文</p>	<p>博士論文に加筆・修正を加え、『発達障害支援の社会学』（東信堂）を出版した。内容は、著書の概要を参照。</p>
<p>8 「医療化の衰退と物語作用ー少年事件をめぐる言説の分析」</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年6月</p>	<p>南山大学紀要『アカデミア人文・自然科学編』第16号, pp105-118</p>	<p>少年事件報道は、物語性を有するものであるが、そこに不安定要素をもたらす医療化言説は物語を崩壊させるため、衰退していくであろうことを新聞記事と発達障害児・者の親へのインタビューデータに基づいて明らかにした。 共著：加藤隆雄、木村祐子</p>
<p>(その他) (報告書) 1 「若年者の就業状況・キャリア・就業能力開発の現状」</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年9月</p>	<p>『JILPT 資料シリーズ』No.61 独立行政法人労働政策研究・研修機構, pp.2-27, pp.32-5 担当</p>	<p>1990年代以降、非正規雇用者の増加が指摘されており、とりわけ若年者においてその大幅な上昇が問題化している。そこで、労働政策研究・研修機構は、若年層（フリーターやニート）の雇用状況の変化とその背景要因を分析するために、『就業構造基本調査』（総務省統計局）の特別集計を過去のデー</p>

2 「理工系女子学生のキャリア展望調査報告書」	共著	平成 27 年 12 月	お茶の水女子 大学 pp.5-60 担当	タ (2002 年、2005 年) と比較しながら分析した。 共著：小杉礼子、 <u>木村祐子</u>
(学会発表) 1 「教育場面における不適応行動の医療化－学習障害の事例から」	単	平成 16 年 9 月	日本教育社会 学会第 56 回 大会 東北大 学	全国の大学に所属する理工系女子学生 および大学院生のキャリア展望とそれ を達成するうえでの問題点を明らかに した。 共著：中島ゆり、 <u>木村祐子</u>
2 「発達障害児をめぐる解釈 と実践－不適応と非行の間」	単	平成 17 年 9 月	日本教育社会 学会第 57 回 大会 放送大 学	内容は (学術論文) の 2 を参照。 教育や非行の問題が語られる際に、「発 達障害」がどのように語られ、扱われ ているのかを検討した。医療的な解釈 (発達障害) は、これまで語られてき た言説 (非医療) をうまく取り込みな がら拡大していることが明らかになっ た。
3 「少年非行における医療的 な解釈」	単	平成 18 年 5 月	日本保健医療 社会学会第 32 回大会 立教 大学	内容は (学術論文) の 4 を参照。
4 「教育問題における心理主 義化の動向と理論的検討－原 因帰属の観点から」	単	平成 18 年 9 月	日本教育社会 学会第 58 回 大会 大阪教 育大学	人の内側にある「こころ」を重視する 傾向 (心理主義化) が 1990 年代以降、 さまざまな領域 (ビジネス、教育、司 法、医療など) で指摘されるようにな った。心理主義化は、形を変えながら 医療化との関係性を密にしはじめてい る。そこで、両者の関係性を理論的に 考察した。
5 「少年非行と発達障害の関 連性についての言説と実践」	単	平成 18 年 10 月	日本教育社会 学会第 59 回 大会 茨城大 学	内容は (学術論文) の 4、6 を参照。
6 「中学生における心理主義 的な意識と行動」	共	平成 19 年 9 月	日本教育社会 学会第 60 回 大会 上越教 育大学	内容は (学術論文) の 3 を参照。 共同発表：加藤隆雄、小針誠、 <u>木村祐 子</u>
7 「『発達障害』者支援にみる 医療の不確実性－支援機関に おける連携の限界」	単	平成 21 年 10 月	日本社会学会 第 82 回大会 立教大学	内容は (学術論文) の 7 を参照。
8 「不確実性の管理・運用と 医療化－発達障害児の支援者 と当事者の語りから」	単	平成 25 年 10 月	日本社会学会 第 86 回大会 慶應義塾大学	発達障害児の親 (9 名) へのインタビュ ー調査に基づき、彼らが医療の曖昧さ や不確かさ (不確実性) とどのように 向き合い、それらを乗り越えてきたの かを明らかにした。

9 「発達障害という選択とその困難－親へのインタビュー調査から」	単	平成28年9月	日本教育社会学会第68回大会 名古屋大学	発達障害児の親の医療に対する志向性（積極性や熱心さなど）が診断や療育・治療に与える影響について検討した。当事者やその親が「健常児」／「障害児」を選択するプロセスが明らかになった。
10 「新聞記事における少年犯罪報道の分析－医療化論と物語論の視角から」	共	平成29年10月	日本教育社会学会第69回大会 一橋大学	内容は(学術論文)の8を参照。共同発表:加藤隆雄、木村祐子
(書評・リプライ) 1 鶴田真紀氏の『発達障害支援の社会学』の書評に答えて	単著	平成28年5月	『教育社会学研究』第98集, pp.266-267	鶴田氏の書評をうけて、医療における不確実性の管理と運用の変化について論じた。
2 書評に答えて	単著	平成28年10月	『ソシオロジ』第61巻2号, pp.99-103	土屋葉氏の書評に答え、発達障害児の当事者（障害児とその親）と医療の関係性について論じた。
3 書評 村田観弥[著]『障害支援と関係の教育学－専門性の権力をめぐって』	単著	平成30年11月	『教育社会学研究』第103集, pp.158-160	障害児・者の支援者が専門性を獲得していく過程とそこに付帯する権力についての研究概要を紹介した。